

多文化クラスと創造性

—学生による討論形態の模索から—

徳井厚子

1 本報告の目的

従来、異文化接触状況におけるコミュニケーションの研究では、摩擦等ネガティブな側面に焦点が当てられる傾向が多かった。N.Adler (1997) は多文化グループの欠点として、「一体感を育てない、不信感、固定観念、コミュニケーションミス、不正確さ、ストレス」等をあげている。しかし、一方で多文化集団は、創造性の増大、より広い視野、より多くの優れたアイデアを促し、創造性は的確な問題規定、効果的解決策、優れた意思決定を可能にするという利点を挙げている。筆者は異文化接触状況における多文化集団のポジティブな側面の研究も必要であると考えます。

本研究では筆者の所属する大学の多文化クラス（留学生、日本人学生、外国人子弟等異なる背景をもった学生によって構成されているクラス）の学生たちによる模索によって生み出された幾つかの創造的な討論形態を紹介し、創造性という観点から多文化集団のポジティブな側面についての考察・実践報告を行う。

尚、本稿では、コミュニケーションを「参加者が相互に影響を及ぼし合いながら意味を共有しあっていくプロセス」と捉える。

2 実践報告

2-1 プログラム概要

まず、プログラムの概要を説明する。多文化クラス「日本事情ゼミナール」（現・異文化理解とコミュニケーション）は以下の目的で開講された。

異なった背景文化を持つ者が協同作業、討論等を通して多様な意見・価値観に触れることにより、異文化接触によって生ずる様々な問題を解決していく力を身につけ、内省を通して自分自身の中にある自文化主義的な考えから脱却すること。

科目の位置づけは共通教育科目（学部1年生対象）であり、週1コマ（90分、半期15回）開講され、単位は全員に与えられる。各回の受講者数は約50名であり、これまで受講した留学生は日本語能力試験1級程度である。本ゼミの最も大きな特徴は、学生主体で運営されていることである。運営方法は以下の通りである。

(1)多文化グループの編成 (2)アイスブレイキング (3)グループによる共同プロジェクト（教室外） (4)プレゼンテーション・討論 (5)レポート集の発行

2-2 異文化コミュニケーションにみられる多様な側面

多文化クラスは異なった語学力、文化背景をもつ学習者の集団であるため、クラス内での

コミュニケーションは異文化コミュニケーションである。これまで学生間のコミュニケーションでは、次のような多様な側面がみられた。

まず、語学力の差が挙げられる。特に留学生の場合、語彙不足や、「何て言ったっけ？」等のような修正を促す表現が不足していること等から、日本人学生との間にコミュニケーション上の衝突がみられることが多い。

次に、コミュニケーションスタイルの差が挙げられる。日本人学生の場合、「……だと思わなければならない……」「ちょっと聞いてみたいと思ったんですけども」のような間接的なスタイルをとるのに対して、留学生の場合には賛成、反対意見をストレートに述べる等直接的なスタイルがみられた。また、留学生は衝突することを特に恐れないのに対し、日本人が衝突を回避しようとする傾向にあるのがみられた。このようなコミュニケーションの違いが原因で両者の間に摩擦が生じることが多かった。

さらに、留学生、日本人学生の評価の側面の差が挙げられる。筆者は毎回の授業終了後、形成的評価として、4つの質問項目（注1）について自由記述式で評価を行っている。これらの自由記述式の回答を、単語を単位として取り出し、独自に26項目別に選定、分類した結果（注2）、留学生、日本人学生に次のような差がみられた（拙稿1998）。まず、留学生が多く挙げている側面には、日本語力、オープンネス、アイデア、感情表出がみられたが、日本人学生、帰国生、外国人子弟が多く挙げている側面には、一体感、和やかさ、チームワーク、他者配慮、共感がみられた。同じ活動に参加しながらも、異なった側面を評価していることがわかる。これは、双方のコミュニケーションスタイルの違い、相手への期待のズレが影響しているためと考えられる。また、自己のコミュニケーション能力に言及していた回答の中で、肯定的な評価は留学生の場合、66%であったのに対し、日本人学生、帰国子女、外国人子弟は39%であった。日本人学生は留学生に比べ、話すことに対して消極的で、不安感や苦手意識を抱いている者が多いことがわかる。

以上挙げたように、多文化クラスにおいては参加者の背景が異なるだけに、語学力、コミュニケーションスタイル、評価の側面の差など多様な側面がみられた。こうした差は参加者間にコミュニケーション上の摩擦を生じさせ、またストレスを増大させる原因になる。では、異文化コミュニケーションにおける討論形態や教師の役割はどのようなものが望ましいであろうか。次節では、多文化クラスの開設初期3年めまでを中心に、学生による討論形態及び教師の役割の模索を紹介する。

2-3 討論形態と教師の役割の模索

本ゼミは開講当初より学生主体で授業をすすめてきたが、討論形態、教師の役割はこれまで次のような模索を行ってきた。

開講1年目のクラスは12名であったが、討論形態は主として懇談会形式であり、教師の役割は指導者、アドバイザーとしての役割が主であった。討論形態、教師の役割とも試行錯誤の時期であったといえる。2年目からは受講者数が50名前後に増えた。この時期には学生たちによりディスカッション、ディベート等従来の討論形態が試みられたが、討論形態の差による参加度の差がみられた。例えばディベートの場合、日本語力の不足している留学生が日本人学生の早口についていけず消極的でストレスがたまる傾向がみられ、ディスカッション

の場合、日本人学生が消極的になり、ストレスがたまる傾向がみられた（拙稿1997）。この時期の教師の役割は、教室内のコミュニケーション、グループプロジェクトなどでおこる摩擦のミディエーターとしての役割が主であったといえる。具体的にはコミュニケーション上の問題についての気づきを促したり、当事者間で問題解決できるようなアドバイスを授業後のコメントやレポート集の編集後記を通して行った。

「結婚について」は各国の様々な結婚のスタイルが紹介されていて、興味深かった。ディスカッションを聞いてひとこと。このゼミはいつもだが、まず、「違い」がみなさんの興味をひきつけるようだ。でも、違いに驚いたり笑ったりするだけでなく、もう少し先にふみこんで「じゃあ、この違いってなぜなんだろう？なぜ今自分は笑ってしまったんだろう？自分が相手の立場だったら？」と考えてみてほしい。そう考えていくうちに共通点も見えてくるかもしれない。「略語について」の発表はプレゼンテーションの方法がとても工夫されていた。皆をひきこみ、楽しいクラスになったことは成功だった。しかし、評価シートを読むと略語は留学生にとってちょっと難しかったのでは？という印象も残る。外国へ行って映画を見て周りの人たちは皆笑っているのに意味がわからなくて自分だけは笑えない……わたし自身留学したときにこんな体験をよくしたものだ…… 「編集後記」より

多文化クラスの場合、参加者間のコミュニケーションは異文化コミュニケーションであり、摩擦が生じやすい。クラス内での討論形態もディスカッション、ディベート等の従来の討論形態をそのまま導入するには限界がある。しかし、N.Adler（1997）も指摘するように多文化集団には創造性等のポジティブな側面も備えている。では、どのようにすれば多文化集団のポジティブな側面をひきだすことができるだろうか。まず、教師の役割という観点から考えてみたい。

筆者は、多文化クラスの教師の役割は、アドバイザー、ミディエーターの他に学生が主体的に自ら問題を発見し、解決していくよう側面から導くファシリテーターとしての役割が重要ではないかと考えた。筆者は1年目より、活動についての内省を促すため、毎回の授業終了後、自由記述式の評価（注1参照）を行い、1カ月に一度レポート集を発行しているが、これに加えて3年目後半より、次のような活動を試みた。

まず、開講初期にブレインストーミングとしてどのような運営方法がふさわしいか、クラス全体で自由に意見を出し合う時間を設けた。ここでは運営方法や討論形態について様々な意見が飛び交うがまとまらないという経験となる。一見無駄なようであるが、ここでは、多文化クラスでのコンフリクト状況の認識、ストレスを体験することを主な目的としている。時には「自分たちによる納得のいく運営方法」を考え出すまで2コマ論議を重ねる事もある。

また、グループ結成時初期に「自己紹介」「グループによる旗造り」を行う等アイスブレイキングに時間をかけるようにした。この目的は、1) 参加者の自己開示を大きくする2) メンバー間の信頼感を高める3) グループ内で意思決定のプロセスを体験する4) グループの一体感と競争心をもつことである。

2-4 学生による創造的な討論形態の模索

多文化クラスはコミュニケーションブレイクダウンなどの欠点もあるが、同時に多様性の中から創造性を増大させるという潜在的な利点を兼ね備えている。Buckminster Fuller はシナジーについて「人が古いパターンから開放されるのを助け、さらにそれまでは許容されていた無知の殻を破ることが出来る新しい考え方」としている（注3）。本節では、3年目後半以降から6年目前半までの多文化クラスで学生自身によって模索された創造的な討論形態を紹介する。新たな討論形態の模索の過程を通し、多様性や摩擦という状況の中からシナジーが形成されていく過程をみることができよう。

まず、97年度後期（5年目後半）の授業において学生によって作りだされた討論形態の模索の過程を紹介する。（受講者数は全57名、うち日本人学生34名、留学生24名、留学生の出身国は中国、台湾、マレーシア、韓国、ベトナム、サウジアラビアである。）尚、1グループ7、8名で構成されており、各グループが授業（90分）を運営するという方法をとっている。（なお、教師は授業終了後3分程度のコメントを述べている）。授業は次の番号順で行われた。

1 「血液型について」（グループディスカッション）

クラス全体を血液型に分け、グループを結成し、「自分（相手）の血液型に対してどう思うか」「なぜ日本人は血液型でステレオタイプをもってしまうのか」等について全員でディスカッションを行ったが、それぞれのグループが意見を出すにとどまり、討論にはならなかった。

2 「少年犯罪について」（模擬裁判+ディベート）

少年犯罪でマスコミが加害者の写真を掲載したことの是非について、発表グループが模擬裁判を行い、その後クラス全体をマスコミの弁護人 vs 検事、ジャッジの3グループに分け、ディベートを行った。しかし、ジャッジの役割の学生が発言の機会を与えられず、傍観者のようになったこと、弁護人の立場になった学生が自己の立場と異なることにストレスを感じる学生が多くみられた。

3 「手紙と電話どちらがよりよいコミュニケーションの手段か？」（劇+ディベート）

まず、導入部分では発表グループがペアで電話と手紙でのやりとりを劇にし、その後、クラス全体を手紙派、電話派、ジャッジに分け、ディベートを行った。最後にジャッジが全員意見を述べる等ジャッジにもストレスが溜まらないよう工夫されていた。

4 「死刑について」（ディベート+移動タイム）

死刑について賛成か反対かディベートを行った。参加者がストレスを感じないように、途中で2回の移動タイムを設け、参加者が自由に移動できるよう工夫されていた。

5 「もし性が違ったら」（劇+ディベート、立場の交替）

まず、発表グループが男女が逆の役割で劇を行った。その後、まず、クラス内で男女に分かれ、男女の役割についてディベートを行った。次に男女を逆の立場にしてディベートを行った。これは途中で立場を交替することによって相手の立場に立って考えることがねらいである。しかし、実際は感情のレベルで相手の立場に立つことが困難であった。

6 「大学生活について」（小グループディスカッション）

教室を2つ確保し、ディスカッションを行った。必ずひとり1回発言するよう義務づけた

が、これはディスカッションに消極的な学生が何人かいたためである。普段より少人数になったため、普段発言しなかった学生も積極的に参加していた。

7 「言葉のおもしろさ」(クイズ形式)

韓国語、中国語、日本語で共通に使われているが意味の違う語についてクイズ形式で行った。ゲーム感覚で参加したが、身近に使われている漢字の使われ方が違うなど意外な発見があった。

1～7から、コミュニケーション上のストレスがたまらないよう、また活発なディスカッションが行われるよう工夫されるなど、回数を重ねるごとに失敗の経験を生かしながら古いパターンを打破し新しい討論形態を模索していったシナジー形成のプロセスが窺える。これらの他にも、これまで幾つかの創造的な討論形態が学生たちによって模索されている。

例えば、従来のディベート形態にさらに工夫を加えた形態としては、ディベートに発言席や留学生タイムを設けた形態、ディスカッションとの混合の形態であるディベカッション(拙稿1997)等が試みられた。また、次のように劇を演じながら次第にクラス全体をひきこんでいく方法も試みられた。

○「援助交際について」まず、援助交際を行っている中年の男性の相談番組の様子を発表グループが劇にし、次に教室全体のメンバーをひきこんでいきながら、クラスの参加者全員と中年の男性のやりとりを行った。

○「少年犯罪について」出版社の編集会議という想定でまず、発表グループが劇を行った。殺人放火をした未成年の少年の実名報道をすべきか否かについて編集会議を行ったが、その会議が二派に分かれてしまう。次にクラスの参加者全員が自分の意見にもとづきいずれかのグループに入り、編集長を説得するための作成をたてた。その後、それぞれの考えを発表した後、移動タイムを設け、最後に編集長が結論を出した。

それぞれの討論形態は従来のディスカッション、ディベートにさらに工夫を加えたり、あるいは劇などと組み合わせるなど創造的な形態となっている。

では、学生はどのようにアイデアを出し合っているのだろうか。模擬裁判とディベートを行ったグループのメンバーの一人(日本人学生)へのインタビューを紹介する。

「模擬裁判とディベートで行うことが決まった後、皆でまず、模擬ディベートを行ってみた。その後、模擬裁判のシナリオを誰がつくるのか、という時に日本人Aさんと留学生Bさんがどちらもリーダー的でどちらがつくるかで迷った。結局はBさんが原案を作ったが、それを皆で完璧なものへと直していくうちに皆の協力体制ができていったと思う。もし日本人がシナリオを書いていたら完璧すぎて一人にまかせる雰囲気が出てしまっただろう。シナリオは何度もかき直したが、一人が突っ走ろうとすると留学生Cさんが批判的、客観的なアドバイスをしてくれた」。

グループで問題を解決していく中で協力体制ができ、アイデアを出し合っていく過程が窺える。

3 創造性の要因と教師の役割—結びにかえて—

多文化クラスのコミュニケーションは異文化コミュニケーションであるため、摩擦が多い等ネガティブな面も備えている。しかしその一方でコンフリクトの状況を認識し、解決して

いく中でどのようにすれば全員が参加できるコミュニケーション形態が可能か、その模索の中で従来とは異なった新たな形態を創造していくというポジティブな可能性を備えている。

筆者は多文化集団における創造性の要因として、(1)グループ形成初期のメンバーの信頼及び自己開示の大きいこと (2)コンフリクトの状況の体験と認識 (3)内省 (4)グループの一体感およびグループ間の競争心を挙げたい。多文化クラスの教師はこのような状況を促す役割が必要であるといえよう。また、ハウエル・久米(1992)は「対話者同士がお互いのもっている知識、経験、知恵、洞察力を自由な雰囲気の中で話し合い、有効に組み合わせられたとき、創造力が発揮される」としているが、多文化クラスの教師にとってこのような雰囲気をつくりだす役割も重要であると考えている。今後も引き続き検討を続けていきたい。

本稿は、H10年度異文化間教育学会大会(於神田外語大学)での発表をもとにまとめたものである。

<注>

- 1 質問項目は次の通りである。
 【自己評価】あなたの今日の授業への参加のしかたを評価してください。
 【他者評価】特に印象に残っている人は誰ですか?なぜですか?
 【発表グループへの評価】発表グループについて評価してください。
 【授業評価】今日の授業について評価してください。
- 2 95年度前期,後期計10回分総数,対象者 日本人学生40名,外国人子弟1名,留学生25名(マレーシア,中国,韓国,台湾,香港,スリランカ,ベトナム)回収率80%の分析結果である。
- 3 Nancy Adler, 1997. International Dimensions of Organizational Behavior, South Western.

<参考文献>

- ウィリアム・ハウエル,久米昭元 1992 『感性のコミュニケーション』
- 徳井厚子 1997 「異文化理解教育としての日本事情の可能性—多文化クラスにおけるディベケーションの試み—」『日本語教育』92号 pp200-211
- 徳井厚子 1998 「多文化クラスにおける評価形態の模索」H9年度文部省科学研究費研究成果中間報告書『多文化クラスの大学間および地域相互交流プロジェクトの実施と評価に関する研究』土屋千尋他共同
- 徳井厚子 1998 「『多文化クラス』の集団発達過程—事例—大学・地域との接触から—」信州大学教育システム研究センター紀要第4号
- 渡辺 淳 1997 「異文化間リテラシーと演劇的知」『異文化間教育』11, pp66-79
- Nancy Adler 1997 International Dimensions of Organizational Behavior, South Western

英文要旨

Creativity in a Multicultural Class

— A process of synergy in generating new discussion styles —

Cultural diversity causes a lot of communication problems due to the differences of communication styles and language levels. However, cultural diversity can become an advantage in creating new ideas. This paper shows a process of synergy which generates new discussion styles in a multicultural class.

First, this paper points out several factors which cause communication breakdown between native and non native students. These are the differences in language levels, communication styles, and point of view of evaluation among the students. For example, the analysis of the student's evaluation shows: Japanese native students tend to evaluate focusing on empathy, cooperation, harmony, whereas non native Japanese students tend to evaluate focusing on openness, expressiveness, and new idea. As for the communication competence for self evaluation, native students tend to be negative whereas non native students tend to be positive. These differences cause the communication breakdown among them.

Secondly, this paper points out creativity as an advantage of diversity by showing the new discussion styles which was generated by the students themselves in a multicultural class e.g. the combination of discussion and debate, the combination of drama and debate etc. These new styles make them possible to communicate each other effectively. These process of generating new ideas can be considered as an example of the cultural synergy.

Thirdly, this paper reveals several factors as contributing to the creativity in diversity; building trust and self disclosing in the early stage of the group formation, facing the conflict, making group identity, having a competitive spirit among the groups.